

## 中学校におけるキャリア教育とキャリア意識の形成

前田 健一 中條 和光 木本 一成 藤井 志保  
箕島 隆 藤田 敬子 新見 直子 松田由希子

### 1. はじめに

青年や若年成人の職業選択や職業生活をめぐるわが国の問題として、フリーターやニートの増加、若年者の早期離職が指摘されている（労働政策研究・研修機構・厚生労働省，2007）。それによると、フリーターの数は2003年の217万人をピークに、ニートの数は2002年から2005年の64万人をピークに、それ以降若干減少傾向にあるが、依然として高止まり状態にある。また、1992年以降の若年者における早期離職率は、中卒で70%、高卒で50%、大卒で30%の状態が続いている（若年者キャリア支援研究会，2003）。

キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書（平成16年1月28日）（以後、キャリア教育報告書と略す）は、キャリア教育が求められる背景として次の2点を指摘している。第1は、学校から社会への移行をめぐる様々な課題である。経済のグローバル化に伴うコスト削減や経営の合理化等、就職・就業をめぐる環境の激変によって、企業が経験者や安価な労働力を求めるようになり、新規学卒者に対する求人は著しく減少し、求職希望と求人希望との不適合が拡大している。また、若者自身の資質等をめぐる課題として、職業観・勤労観の未熟さ、職業人としての基礎的資質・能力の低下を指摘している。第2は、子どもたちの生活・意識の変容である。子どもたちの成長・発達上の課題として、身体的な早熟傾向に比して、精神的・社会的自立が遅れる傾向にあり、人間関係をうまく築くこと、意思決定をする、進路を選択する等の職業観の形成や確立に関わる事柄に苦手意識をもつ子どもが増加している。また、高学歴社会におけるモラトリアム傾向として、進路意識や目的意識が希薄なまま「とりあえず」高等教育機関に進学する若者の増加もフリーター、ニート、早期離職の問題の背景として指摘されている。

小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引  
一児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために

一（文部科学省，平成18年11月）によると、キャリア教育という用語は、文部科学行政関連文書の中では、中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」（平成11年12月）において初めて登場した。この答申では、小学校段階から発達段階に依じてキャリア教育を実施する必要があると提言されている。キャリア教育とは、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」であり、端的には「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」である（キャリア教育報告書，平成16年1月28日）。

これまで、キャリア教育の一環として職場体験やインターンシップの他、企業見学や社会人・職業人講話、ボランティア体験等々の多様な体験活動が活用されてきた。特に、中学校における職場体験は全国的に実施されており、平成18年度では、公立中学校10,124校中9,528校（94.1%）が、国立中学校78校中49校（62.8%）が、私立中学校708校中126校（17.8%）が実施している（国立教育政策研究所生徒指導研究センター，2007）。文部科学省は、平成17年度からの「キャリア教育実践プロジェクト」の中で、中学校において5日間以上の職場体験の実施を全国的に推進している。広島大学附属三原中学校では、平成12年以来、中学2年生を対象に「わくわく WORK」と称する職場体験学習を実践してきた。今年度は8年目で、2月11日（月）から2月15日（金）までの5日間にわたって地域の事業所との連携・協力のもとに実施される予定である。

キャリア教育の視点から職場体験学習の充実を図るためには、事前・事後指導のみならず、年間の教育課程の中に職場体験学習を適切に位置づけ、計画的・系統的に展開する必要がある。また、キャリア教育全体の評価と共に職場体験学習の評価も、適切な評価方法を使用して行い、その結果を次の指導に活かしていく必要がある。これまでの職場体験学習の評価では、生

徒自身の感想や教師による態度や行動の観察等の定性的な資料に基づいて行われることが多く、生徒自身のキャリア意識等の内面的変化を定量的に捉えることが少なかった。生徒自身の内面的変化を捉えるためには、キャリア意識等を量的に測定する尺度の開発が必要であるが、現在のところ、この目的に十分適した尺度はみられない。

本研究では、国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2002）が提唱している職業観・勤労観の形成に関連する4つの能力領域（人間関係形成能力、情報活用能力、将来設計能力、意思決定能力）を参考にして、中学生のキャリア意識を測定する尺度を開発し、生徒自身の意識や態度を定量的に測定する。国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2002）によると、4つの能力領域の内容は次のように説明されている。人間関係形成能力は、他者の個性を尊重し、自己の個性を発揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・協同してものごとに取り組むための能力である。情報活用能力は、学ぶこと・働くことの意義や役割およびその多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や生き方の選択に生かすための能力である。将来設計能力は、夢や希望をもって、将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計するための能力である。意思決定能力は、自らの意思と責任でよりよい選択・決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服するための能力である。

## 2. 目的と方法

### 目的

広島大学附属三原中学校では、2008年2月に中学校2年生を対象に、わくわくWORK みはら2007（職場体験学習）を実施する。事前指導として、2007年7月以降、オリエンテーション、希望調査、職種についての学習等を行ってきた。本研究の計画段階では、職場体験学習の前後でキャリア意識の変化を比較検討することを目的としていたが、職場体験の実施前に本稿を作成する事情から目的を変更した。本研究の主な目的は、次の2点である。（1）職場体験学習に対する生徒の期待と不安に基づいて、期待高・不安高群、期待高・不安低群、期待低・不安高群、期待低・不安低群の4群に生徒を分類し、生徒のキャリア意識と行動特徴、保護者の子どもに対するサポートと教育観、担任教師からみた生徒の行動特徴について比較検討する。（2）正準相関分析を使用して、生徒のキャリア意識、生徒の行動特徴、親のサポート、親の教育観の関連を明らかにする。

### 方法

**対象者** 中学2年生2クラスの生徒85名を対象に生徒調査を、その保護者を対象に保護者調査を、担任教師2名を対象に教師調査を実施した。そのうち、回答に不備や欠損値のなかった有効回答者は、生徒83名（男子41名、女子42名）、保護者61名（父親3名、母親58名）、担任教師2名であった。

**調査手続き** 生徒には生徒調査を、保護者には保護者調査を、教師には教師調査をそれぞれ実施した。いずれの調査においても、回答にあたって、回答しづらい項目がある場合は、無理に回答しなくてよいことを調査用紙の表紙に印刷して説明した。

**生徒調査**（1）キャリア意識 国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2002）の「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）—職業的（進路）発達にかかわる諸能力の育成の視点から—」を参考に、4領域（人間関係形成13項目、情報活用12項目、将来設計11項目、意思決定13項目）の内容に対応させて49項目を作成した。回答にあたっては、各項目の内容について、そう思う程度を6段階（1：とてもそう思わない、2：あまりそう思わない、3：どちらかというところ、4：どちらかというところ、5：わりとそう思う、6：とてもそう思う）で回答を求めた。

（2）職場体験学習（わくわくWORK）に対する期待と不安 教育実習に対する不安を測定する尺度（大野木・宮川、1996）を参考に、職場体験学習（わくわくWORK）に対する期待や不安をたずねる9項目を作成した。回答にあたっては、各項目の内容が自分の考えや気持ちにあてはまる程度について、5段階（1：ぜんぜんあてはまらない、2：あまりあてはまらない、3：どちらともいえない、4：すこしあてはまる、5：非常によくあてはまる）で回答を求めた。

（3）行動特徴 普段の学校生活における行動特徴について規律性、社会性、攻撃性、孤立性、学習意欲を仮定して16項目を作成した。回答にあたっては、各項目の行動を日常的に行う程度について、4段階（1：まったくない、2：あまりない、3：たまにある、4：よくある）で回答を求めた。

**保護者調査** 保護者調査では、最初に本調査への協力の可否について「1. 承諾する」または「2. 承諾しない」のいずれかを選択するよう求めた。「1. 承諾する」を選択した保護者にはその他の質問に回答するよう求めた。「2. 承諾しない」を選択した保護者にはその他の質問に回答しないよう指示した。いずれを選択した場合も、調査用紙を封筒に厳封して生徒を通じて提出するよう印刷して指示した。

(1) サポート ソーシャルサポートに関する先行研究(例えば、森・堀野, 1992; 嶋, 1991)を参考に、独自に6項目(情緒的サポート3項目, 情動的サポート3項目)を作成して使用した。回答にあたっては、各項目のサポートを自分の子どもに日頃している程度について、5段階(1:まったくしない, 2:あまりない, 3:少しする, 4:わりとする, 5:とてもよくする)で回答を求めた。

(2) 教育観 子どもの将来や教育に関する考え方や意見について独自に9項目を作成した。回答にあたっては、各項目の内容にそう思う程度について、5段階(1:とてもそう思わない, 2:あまりそう思わない, 3:どちらでもない, 4:わりとそう思う, 5:とてもそう思う)で回答を求めた。

教師調査 教師調査では、生徒調査の行動特徴で使用した項目の一部を使用して、担任している生徒全員について評定するよう依頼した。本研究では、「友だちに親切で思いやりのある行動をする」と「授業や学習に意欲的に取り組む」の2項目を取り上げた。各生徒がそれぞれの行動を日常的に行う程度について、4段階(1:まったくない, 2:あまりない, 3:たまにある, 4:よくある)で回答を求めた。

生徒調査の得点化の方法 (1) キャリア意識 キャリア意識を調べる49項目の回答データに基づいて、主成分分析を行い4つの尺度得点(人間関係形成, 情報活用, 将来設計, 意思決定)を構成した。まず、逆転項目の得点を逆転した後、領域別に1成分を仮定した主成分分析を行った( $n=83$ )。その結果、人間関係形成では11項目( $\alpha=.79$ )、情報活用では8項目( $\alpha=.63$ )、将来設計では11項目( $\alpha=.78$ )、意思決定では10項目( $\alpha=.78$ )がそれぞれ当該成分に対して.30以上の負荷量を示した(表1参照)。各領域の尺度得点は、1項目あたりの平均値を算出して使用した(得点範囲: 1点~6点)。各尺度得点は、高いほど各キャリア意識が高いことを表す。

(2) 職場体験学習に対する期待と不安 職場体験学習に対する期待や不安を調べる9項目の回答データに基づいて、因子分析(重みづけのない最小二乗法, Promax回転)を行った( $n=48$ )。固有値の推移と因子の解釈可能性を考慮して2因子解を採用して再度、因子分析を行った。その結果、第1因子には6項目( $\alpha=.91$ )が、第2因子には3項目( $\alpha=.76$ )がそれぞれ.50以上の高い負荷量を示した(表2参照)。第1因子は、職場体験学習に対する積極的な態度や期待に関する項目から構成されていたので、「職場体験期待」因子と命名した。第2因子は、職場体験学習に対する不安に関する項目から構成されていたので、「職場体

表1 キャリア意識

項目	成分
<b>人間関係形成</b>	
4 友だちのよいところをもっと知りたいと思う	.64
7 友だちが困ったときには、助けることができると思う	.71
11 友だちの気持ちを大切にすることができると思う	.51
15 自分がいやなことは、友だちにははっきり言うべきだと思う	.55
19 友だちのよくないところは注意すべきだと思う	.57
21 ふざけて友だちをからかわないようにしたいと思う	.46
25 違う学年の人とも話をしたいと思う	.43
29 自分の気持ちや考えを友だちにわかりやすく伝えることができると思う	.64
33 落ち込んでいても、友だちとは明るく話ができると思う	.56
36 友だちに悪いことをしたと思ったら謝ることができると思う	.69
42 友だちと意見が違ったときには自分の意見を強く言うと思う	.48
寄与率(%) 32.76	
<b>情報活用</b>	
2 高校ではどんな勉強するのかを知りたいと思う	.36
8 調べようと思ったら、インターネットなどを使って自分で調べることができると思う	.58
12 わからないことは、先生や友だちに聞くことができると思う	.70
16 調べたことを人にわかりやすく発表することができると思う	.60
26 働いている人はどのようにして、その職業についてのかを知りたいと思う	.44
43 学級の係や当番の仕事は、きちんとやるのが大切だと思う	.67
47 努力しない人は、仕事で失敗すると思う	.42
49 遊んでばかりいると、りっぱな大人になれないと思う	.39
寄与率(%) 28.55	
<b>将来設計</b>	
3 人から頼まれたことでも、うまくできないと、やめてしまうと思う*	.50
5 そうじや係の仕事は自分がしなくても他の人がしてくれると思う*	.73
9 みんなで決めた係や仕事は、きちんとやりたいと思う	.65
13 やる気になったら、家のそうじや手伝いができると思う	.60
17 子どもは、将来のためにしっかりと勉強すべきだと思う	.50
23 計画や時間を決めて勉強したいと思う	.75
27 自分の未来は明るいと思う	.37
31 だらだらとテレビをみないようにしようと思う	.54
34 やる気になったら、集中して勉強することができると思う	.50
38 計画を立てても、そのとおりにできないと思う*	.36
44 宿題や勉強は言われてからやればいいと思う*	.63
寄与率(%) 32.58	
<b>意思決定</b>	
6 何でも最後は自分で決めたいと思う	.44
10 みんなと意見が違っても、自分の意見を言うことができると思う	.56
18 遊びに行く前に勉強や宿題をすませるほうがいいと思う	.38
28 すぐにできなくても、できるまでがんばろうと思う	.77
32 失敗しても、あきらめずに、うまくいくまでがんばろうと思う	.85
35 友だちとけんかしても、うまく仲直りができると思う	.55
39 難しいことでも、やる気になったら、できると思う	.63
41 自分のしたことには自分で責任をもつことが大切だと思う	.74
45 失敗したことを反省しても仕方がないと思う*	.30
48 がんばって苦手なことを少なくすることが大切だと思う	.56
寄与率(%) 35.91	

\*逆転項目を表す。

注) 各領域間の相関係数は、人間関係形成と情報活用で $r=.65$ 、人間関係形成と将来設計で $r=.52$ 、人間関係形成と意思決定で $r=.66$ 、情報活用と将来設計で $r=.66$ 、情報活用と意思決定で $r=.69$ 、将来設計と意思決定で $r=.64$ であった。これらの相関係数はいずれも1%水準で有意であった。

「職場体験不安」因子と命名した。各因子の尺度得点は、因子別に1項目あたりの平均値を算出して使用した(得点範囲: 1点~5点)。各尺度得点は、高いほど各因子の傾向が強いことを表す。

(3) 行動特徴 行動特徴を調べる16項目のうち、

表2 職場体験に対する期待と不安

項目	I	II
I 職場体験期待		
2 わくわくWORK(職場体験学習)に行くことが今から楽しみだ	.90	-.17
3 学校では経験できないことを積極的にやってみたい	.88	-.01
5 実際に働く経験をする事で、自分がどのくらい成長できるか楽しみだ	.86	.06
6 仕事の楽しさや難しさを知ることに興味がある	.77	-.02
7 職場の人に認められるように、仕事でがんばりたい	.80	.21
9 わくわくWORK(職場体験学習)のような体験学習は、自分の将来の仕事を選ぶときに役立つと思う	.52	.17
II 職場体験不安		
1 まかされた仕事がきちんとできるか心配だ	.24	.59
4 朝から夕方まで仕事ができるか、体力的に心配だ	-.05	.84
8 職場の人とうまくコミュニケーションできるか心配だ	-.01	.74
因子寄与(%)	44.97	16.89
因子間相関	II	.25

6項目で天井効果と床効果がみられたので、これら6項目を削除した。残りの10項目の回答データに基づいて因子分析(重みづけのない最小二乗法, Promax回転)を行った( $n=81$ )。その結果、3因子が抽出された。第1因子には2項目( $\alpha=.81$ )、第2因子には4項目( $\alpha=.62$ )、第3因子には2項目( $\alpha=.61$ )がそれぞれ.30以上の負荷量を示した(表3参照)。第1因子は、授業態度に関する項目から構成されていたので、「学習意欲」因子と命名した。第2因子は、規律違反や攻撃性に関する項目から構成されていたので、「規律違反」因子と命名した。第3因子は、社会性に関する項目から構成されていたので、「社会性」因子と命名した。各因子の尺度得点は、因子別に1項目あたりの平均値を算出して使用した(得点範囲: 1点~4点)。各尺度得点は、高いほど各因子の傾向が強いことを表す。

表3 行動特徴

項目	I	II	III
I 学習意欲			
6 嫌いな授業でも、まじめに勉強している	.80	.15	.10
16 授業や学習に意欲的に取り組んでいる	.84	-.04	.07
II 規律違反			
7 授業中に、騒いだり、おしゃべりする	-.07	.58	.19
9 友だちに乱暴な話し方をする	.15	.72	-.34
12 先生の言うことをまじめに聞かない	-.35	.57	.16
14 うまくいかないと、怒りっぽくなる	.14	.36	.06
III 社会性			
3 相手の気持ちを考えて話す	.08	.10	.56
13 友だちに親切で思いやりのある行動をする	.09	.03	.74
因子寄与(%)	27.92	12.86	8.83
因子間相関	II	-.40	-
	III	.31	-.19

保護者調査の得点化の方法 (1) サポート 自分の子どもに対する親のサポートを調べる6項目の回答データに基づいて、因子分析(重みづけのない最小二乗法, Promax回転)を行った( $n=61$ )。固有値の推

移から1因子解が妥当と判断された。1因子を仮定して再度分析を行ったところ、6項目( $\alpha=.81$ )すべてが.40以上の高い負荷量を示した(表4参照)。尺度得点は、1項目あたりの平均値を算出して使用した(得点範囲: 1点~5点)。尺度得点は、高いほど自分の子どもに日頃サポートを行っている程度が高いことを表す。

表4 サポート

項目	
1 お子さんに嬉しいことがあったとき、一緒に喜んで喜ぶ	.62
2 受験や進学に関する情報をお子さんと一緒に調べる	.72
3 お子さんの能力を認めたり、努力をほめたりする	.77
4 お子さんのために受験や進学の情報を集める	.49
5 お子さんの進路について相談のったり話を聞いたりする	.66
6 世の中の仕事や職業についてお子さんと話を	.56
	因子寄与(%) 41.37

(2) 教育観 子どもの将来や教育に関する考え方や意見を調べる9項目の回答データに基づいて、因子分析(重みづけのない最小二乗法, Promax回転)を行った( $n=61$ )。固有値の推移と解釈可能性を考慮して2因子解を採用して再度分析を行った。その結果、第1因子には6項目( $\alpha=.78$ )が、第2因子には3項目( $\alpha=.54$ )がそれぞれ.30以上の負荷量を示した(表5参照)。第1因子は、子どもの教育を重視し、そのために積極的に援助をしようとする内容の項目から構成されていたので、「学業進学重視」因子と命名した。第2因子は、人間関係を重視する内容の項目から構成されていたので、「人間関係重視」因子と命名した。各因子の尺度得点は、因子別に1項目あたりの平均値を算出して使用した(得点範囲: 1点~5点)。各尺度得点は、高いほど各因子の傾向が強いことを表す。

表5 教育観

項目	I	II
I 学業進学重視		
1 子どもの進路選択を援助するのは、親の責任だ	.66	.12
2 学力や学業成績が将来の人生を決める	.84	-.19
4 世間で言われているよい学校に進学してほしい	.66	-.10
6 子どもの教育には、できるだけお金をかけたい	.60	.08
7 自分の子どもは、今、勉強することが何よりも大切だ	.61	.03
9 親の意見と対立しても、子どもは自分の進路を自分で決めてほしい*	.33	.01
II 人間関係重視		
3 いろいろな人と付き合う経験が子どもの将来に役立つ	-.03	.46
5 中学時代は勉強よりも友だち関係を大切にすべきだ	-.13	.36
8 仕事をすることで人間関係が最も大切だ	.10	.90
因子寄与(%)	27.91	12.28
因子間相関	II	.23

\*逆転項目を表す。

教師調査の得点化の方法 「友だちに親切で思いやりのある行動をする」と「授業や学習に意欲的に取り組む」の2項目の得点は、クラス別に標準得点を算出して使用した。クラス別に標準得点を算出した理由は、評定した教師間で評価基準に相違があっても、それを修正できると考えたからである。

群構成 職場体験学習に対する期待と不安を調べる項目に回答した者は48名であった。48名の回答データに基づいて2つの尺度得点を算出した結果、職場体験期待の平均値は3.80、職場体験不安の平均値は3.18であった。各尺度得点の平均値の上下を組み合わせて4つの群を構成した。その結果、職場体験期待と職場体験不安の両方とも高い群は18名(男子6名,女子12名)、職場体験期待が高く職場体験不安が低い群は12名(男子5名,女子7名)、職場体験期待が低く職場体験不安が高い群は7名(男子5名,女子2名)、職場体験期待と職場体験不安の両方とも低い群は11名(男子4名,女子7名)であった。以後の群間比較は、これら48名のデータに基づいて分析を行う。

### 3. 成果と課題

#### 職場体験に対する期待・不安の群間比較

生徒調査の結果 (1) キャリア意識 4領域のキャリア意識尺度得点を従属変数として2(職場体験期待の高低)×2(職場体験不安の高低)の多変量分散分析を行った( $n=48$ ) (表6参照)。その結果、職場体験期待の高低の主効果が有意であった( $Wilks' \Lambda = .55, F(4, 41) = 8.24, p < .001$ )。そこで、各領域別に単一変量の分散分析を行った。その結果、人間関係形成では、 $F(1, 41) = 27.44, p < .001$ で、職場体験期待が高い者( $M=4.50$ )が低い者( $M=3.55$ )よりも有意に高い得点を示した。情報活用では、 $F(1, 41) = 22.42, p < .001$ で、職場体験期待が高い者( $M=4.61$ )が低い者( $M=3.68$ )よりも有意に高い得点を示した。将来設計では、 $F(1, 41) = 12.56, p = .001$ で、職場体験期待が高い者( $M=4.41$ )が低い者( $M=3.62$ )よりも有意に高い得点を示した。将来設計では、 $F(1, 41) = 14.81, p < .001$ で、職場体験期待が高い者( $M=4.61$ )が低い者( $M=3.81$ )よりも有意に高い得点を示した。

(2) 行動特徴 行動特徴の3尺度得点(学習意欲, 規律違反, 社会性)別に、2(職場体験期待の高低)×2(職場体験不安の高低)の分散分析を行った( $n=48$ )。その結果、いずれの尺度得点においても有意な群間差は認められなかった(表7参照)。

保護者調査の結果 (1) サポート 保護者調査のサポート得点について、2(職場体験期待の高低)×

表6 各キャリア意識の平均値と標準偏差(SD)

	期待高				期待低			
	不安高		不安低		不安高		不安低	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
人間関係形成	4.35	0.62	4.64	0.73	3.55	0.41	3.55	0.44
情報活用	4.60	0.46	4.61	0.62	3.77	0.70	3.59	0.85
将来設計	4.27	0.61	4.55	0.49	3.70	0.62	3.54	1.11
意思決定	4.63	0.45	4.59	0.73	3.67	0.42	3.95	1.00

表7 各行動特徴の平均値と標準偏差(SD)

	期待高				期待低			
	不安高		不安低		不安高		不安低	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
学習意欲	3.19	0.60	3.00	0.71	2.79	0.76	2.64	1.00
規律違反	2.54	0.55	2.50	0.44	2.18	0.40	2.50	0.81
社会性	3.06	0.62	3.13	0.43	2.93	0.45	2.91	0.63

表8 サポート及び教育観の平均値と標準偏差(SD)

	期待高				期待低			
	不安高		不安低		不安高		不安低	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
サポート	3.50	0.50	3.61	0.65	3.67	0.72	3.52	0.75
学業進学重視	2.90	0.78	3.26	0.53	3.29	0.41	3.72	0.36
人間関係重視	3.77	0.53	3.89	0.65	4.10	0.32	4.11	0.41

2(職場体験不安の高低)の分散分析を行った( $n=48$ )。その結果、有意な群間差は認められなかった(表8参照)。

(2) 教育観 教育観の2尺度得点(学業進学重視, 人間関係重視)別に、2(職場体験期待の高低)×2(職場体験不安の高低)の分散分析を行った( $n=48$ ) (表8参照)。その結果、学業進学重視では、職場体験期待の高低の主効果が有意であり( $F(1, 34) = 4.79, p < .05$ )、保護者の学業進学重視得点は、職場体験期待の低群( $M=3.50$ )が高群( $M=3.08$ )よりも高かった。また、職場体験不安の高低の主効果も有意となり( $F(1, 34) = 4.22, p < .05$ )、保護者の学業進学重視得点は、職場体験不安の低群( $M=3.49$ )が高群( $M=3.09$ )よりも高かった。それに対して、人間関係重視得点では有意な群間差は認められなかった。

教師調査の結果 「友だちに親切で思いやりのある行動をする」と「授業や学習に意欲的に取り組む」の2項目に対する教師評定について2(職場体験期待の高低)×2(職場体験不安の高低)の分散分析を行っ

表9 教師評定の平均値と標準偏差(SD)

	期待高				期待低			
	不安高		不安低		不安高		不安低	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
親切で思いやりのある行動	0.05	0.93	-0.09	1.09	0.33	0.07	-0.58	1.68
授業や学習に意欲的	-0.06	1.14	-0.02	0.93	0.07	0.42	-0.11	1.07

た ( $n=48$ )。分析の結果、どちらの項目にも有意な群間差は認められなかった (表9 参照)。

### キャリア意識, 行動特徴, 親のサポート, および親の教育観の関連

キャリア発達には、すべての学習活動等が影響するため、キャリア教育は学校のすべての教育活動を通して推進されなければならない (キャリア教育報告書, 平成16年1月28日)。この考えに従うと、キャリア意識の形成には、各生徒の学習意欲や社会性など多様な行動特徴が関連すると予想される。また、親からサポートを受けており、親と良好な関係にある青年ほど将来の職業を明確にし、進路選択に対する自信が高い傾向にあることが示されている (例えば, Blustein, Walbridge, Friedlander, & Palladino, 1991; Diemer, 2007; O'Brien, 1996)。これらの先行研究を参考にすると、親のサポートや教育観も子どものキャリア意識の形成に正の影響を示すと予想される。そこで正準相関分析を使用して、4領域のキャリア意識、生徒の行動特徴 (自己評定)、親からのサポート、および親の教育観の関連を検討することにした。正準相関分析を使用する主な理由は、以下の通りである。本研究ではキャリア意識の4領域間、行動特徴の3因子間に有意な相関がそれぞれ示されている。正準相関分析を使用すると、このような互いに関連する得点間の関連を1度に見ることが可能であるからである。

正準相関分析を行う前に、先行研究 (例えば, Bartley & Robitschek, 2000; Turner, Trotter, Lapan, Czajka, Yang, & Brissett, 2006) と同様に、分析に使用する変数に性差があるか否かを検討したところ、いずれの変数にも有意な性差は認められなかった。したがって、以下の正準相関分析では男女を一括して検討することにした。

正準相関分析の結果 ( $n=60$ )、2つの正準相関が有意であり、第1正準相関の説明率は46.81% ( $Rc=.40$ ;  $F(24, 175.64)=2.80, p<.0001$ )、第2正準相関の説明率は44.60% ( $Rc=.39$ ;  $F(15, 141.19)=2.35, p=.005$ )であった。表10は正準相関と元変数群間との構造係数を示したものである。Bartley & Robitschek (2000) と Turner et al. (2006) を参考に、構造係数の有意性の判断基準として.30を設定した。表10をみると、第1正準相関では、学習意欲と社会性が高く、親が人間関係を重視しない教育観をもっている者ほど、4領域のキャリア意識が高いという関係にあることがわかる。第2正準相関では、学習意欲が高く規律違反をしない者ほど、3領域 (情報活用, 将来設計, 意思決定) のキャリア意識が高いという関係にあることがわかる。

表10 正準相関分析結果

	第1正準相関	第2正準相関
人間関係形成	.90	.11
情報活用	.76	.41
将来設計	.35	.87
意思決定	.79	.55
(冗長性)	.21	.12
学習意欲	.45	.73
規律違反	.17	-.84
社会性	.88	.05
サポート	-.03	.18
学業進学重視	-.19	-.21
人間関係重視	-.40	-.29
(冗長性)	.08	.10
正準相関係数	.63	.63

### 4. おわりに

本研究の主な結果は次の4点である。(1) 職場体験学習に対する期待が高い者は低い者よりも、4領域のキャリア意識 (人間関係形成, 情報活用, 将来設計, 意思決定) すべてにおいて高い得点を示した。(2) 職場体験学習に対する期待が低い者の保護者は高い者の保護者よりも、学業進学重視の教育観を強く示した。(3) また、職場体験学習に対する不安が低い者の保護者は高い者の保護者よりも、学業進学重視の教育観を強く示した。(4) 正準相関分析の結果では、全般的に親のサポートや教育観は、子どものキャリア意識とあまり関連しなかった。

子どもの職場体験学習に対する期待や不安は、親の教育観と興味深い関係を示した。職場体験前後のキャリア意識の変化にも同様の関係がみられるのかを検討することが今後の課題である。本稿では、職場体験学習を経験する以前の段階で実施した調査結果をまとめたが、職場体験学習直前と直後の調査を今後継続し、それらの結果を総合して職場体験学習の効果を評価しなければならない。

### 引用文献

- 1) Bartley, D.F., & Robitschek, C. (2000). Career exploration: A multivariate analysis of predictors. *Journal of Vocational Behavior*, 56, 63-81.
- 2) Blustein, D.L., Walbridge, M.M., Friedlander, M.L., & Palladino, D.E. (1991). Contributions of psychological separation and parental attachment to the career development process. *Journal of Counseling Psychology*, 38, 39-50.

- 3) キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書(平成16年1月28日答申)―児童生徒一人一人の勤労観, 職業観を育てるために―
- 4) 中央教育審議会 平成11年12月答申 初等中等教育と高等教育との接続の改善について
- 5) Diemer, M.A. (2007). Parental and school influences upon the career development of poor youth of color. *Journal of Vocational Behavior*, 70, 502-524.
- 6) 若年者キャリア支援研究会 (2003). 若者の未来のキャリアを育むために: 若年者キャリア支援政策の展開 2003年9月〈<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2003/09/h0919-5e.html>〉(2007年8月16日)
- 7) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター (2002). 児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について(調査研究報告書)
- 8) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター (2007). 平成18年度職場体験・インターンシップ実施状況等調査結果(概要)
- 9) 文部科学省 (2006). 小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引―児童生徒一人一人の勤労観, 職業観を育てるために―
- 10) 森 和代・堀野 緑 (1992). 児童のソーシャルサポートに関する一研究 教育心理学研究, 40, 402-410.
- 11) O'Brien, K.M. (1996). The influence of psychological separation and parental attachment on the career development. *Journal of Vocational Behavior*, 48, 257-274.
- 12) 大野木裕明・宮川充司 (1996). 教育実習不安の構造と変化 教育心理学研究, 44, 454-462.
- 13) 労働政策研究・研修機構・厚生労働省 (2007). 「上質な市場社会」に向けて: 公正, 安定, 多様性 2007年8月〈<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/08/dl/s0809-3a.pdf>〉(2007年8月16日)
- 14) 嶋 信宏 (1991). 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究 教育心理学研究, 39, 440-447.
- 15) Turner, S.L., Trotter, M.J., Lapan, R.J., Czajka, K.A., Yang, P., & Brissett, A.E.A. (2006). Vocational skills and outcomes among native American adolescents: A test of the integrative contextual model of career development. *The Career Development Quarterly*, 54, 216-226.